

小説

二十五年目の年賀状

ゆとり 漫

「印刷だけのものは味気ないな」

そんなことをつぶやきながら東彦は年賀状の束をめぐっていた。テーブルをはさんで向かい合っている妻の弘子は、年賀状を二種類に分けてテーブルの上に並べている。デザインなどで気に入ったものとそうではないものを取り分けしているのだ。妻は陶芸と藍染を趣味にしていることからその関係の友人が多い。その友人の中にはなかなか凝ったデザインや版画の年賀状をくれる人もいる。弘子は「これ」と思ったものを、翌年の年賀状に生かそうとしているのだ。

「ハルヒコさんの枚数は相変わらず多いのね。傘寿を迎えたのだからそろそろ整理したら。それにしてもまだ九時前

なのにもう年賀状が届いていたのよね。元日なのに郵便局員さんたちは本当に「苦労様ね」

弘子のことばに東彦も「局員さんには感謝だな」と思いながら、目は年賀状から離れていない。一枚一枚丁寧にめくっていく。絵も宛先も差出人も全て印刷されているものが多くなっている。そう思う東彦本人も、挨拶文は印刷である。「ゴム版に掘ったこともあったなあ」と、遠い昔のことが浮かんで来た。

元日の朝の透명한光が、戸のガラス越しに東彦の背に当たり、それがまるで綿毛で彼の背を包み込んでいるようなふくよかな感触を彼に与えていた。家の前の道路は通る人の姿とてない。

東彦夫妻には子どもが三人おり、二人は結婚をしている

が、孫はいない。大晦日、恒例の家族全員が揃った年越し会を行った。しかし、それ以外の日はそれぞれが別の予定を持ち、元旦だからと改めて訪ねて来ることはない。そのこともあつてか、東彦夫婦たちを包む静寂さは一段と深い元旦であった。

昨年、東彦は八十路を迎えた。年のせいかな、最近はお孫子の姿や写真には直ぐに目が行ってしまう。特にこどものいじらしい仕草やかわいらしい様子には心が奪われる。通りすがりなどにそんな子に会うとつい声を掛けてしまう。笑顔が返って来るとうれしさが込みあがつて来る。年寄りにとって幼児は心の平安と慰め、そして希望を与えてくれる妙薬ではないか、と東彦は思い始めている。

めくっていくうちに赤ちゃんの写真がデザインされている年賀状が出て来た。

その年賀状には、視線を上に向けハイハイしている姿、また、まん丸い目を大きく見開いているあどけない顔、さらに寝息が聞こえてくるような穏やかな寝顔。そして大きく開いた口からは、白く二本の歯が見える。東彦はこれらの四枚の写真を見ているうちに、自然に頬が緩んでいくのを感じた。添え書きには「自分もパパになりました。二〇二四年も三人でがんばります。東彦先生も健康に注意して

過ごしてください」とあつた。一体誰からだろうと差出人を探した。ハガキの下に小さく四角な、そして丁寧な字で 畠山勇樹とあつた。

「勇樹か」

東彦は思わず声を出してしまった。

「勇樹ってだれのこと」

傍でやはり年賀状を見ていた弘子が声を掛けて来た。「教え子だよ。いろいろと苦労を抱えていた子でね、もう何年前になるかな」

東彦は指を折りながら数え始めた。昭和、平成、令和という元号を西暦に変換して新たに数え始めなければならぬ。老いた脳には面倒なことこの上ない。

「二十五年も経っているのだ」

ふう、と息を吐きながら東彦は目を外にやった。日当たりのよい庭の梅の木をつぼみはもうずいぶん膨らんでいた。陽だまりという幸いを存分に享受しているからなのだろう。

「勇樹が結婚し、子まで設けたのか、四半世紀が経っているのも当然だな。欲しがっていた家族が実現でき、幸せに暮らしているようだ。本当によかった」

梅のつぼみに問いかけるように東彦はつぶやいた。

「会ってみようか」

思わず声に出してしまった。

「誰に」

すかさず妻がいぶかし気に問うて来た。

「教え子の勇樹くんだよ」

と言いながら東彦は年賀状を妻の目の前に置いた。

弘子はちらりと目をやると「ふーん、そっか」と素っ気ない返事をし、年賀状を東彦の方に押し戻した。そしてまた、自分の作業を黙々と続けるのだった。

畠山勇樹が、妹の澄江と共に桜が丘小学校に転入の手続きのために来校したのは、二十五年前の九月二日、二学期の始業式の翌日であった。一日は防災の日で、市内の小中学校は一斉に避難訓練を実施していた。校長だった東彦がこの二日を記憶しているのは、この訓練が実施された翌日に、勇樹が妹の澄江と二人きりで転校手続きにやって来たからである。東彦が彼の教員生活の中で、児童たちだけで転校手続きのために来校したという体験は、後にも先にもこの時だけである。しかも、それまでに児童だけで転校手続きに来るといことは全く想定していなかったのである。それだけ希有のことであった。教頭の前田寛一、教務主任の千藤巧にしても同様であった。二人は、どう対処すべきかを校長の渡辺東彦に意見を求めて来たのは当然のことである。

勇樹は五年生、澄江は一年生であった。しかし、二人とも登校の実績が全くなかったのである。その理由を勇樹に聞いてもなかなか要領を得なかった。家庭環境など聞きたいこともあったので教頭が勇樹の在籍校に電話をした。欠席の理由は家庭の事情であった。学校や仕事に通いながら祖父母や親、幼いきょうだいの世話をしなければならぬヤングケアラーであった。当時、この言葉はなかった。しかし、勇樹の場合は家事と澄江の世話のため、学校には通っていないかった、というより通えなかったのである。これは、定義されているヤングケアラーよりさらに劣悪な状態であった。澄江は母親よりも兄の勇樹の世話を多く受けて育って来たのである。

勇樹たちの家庭は、ひとり親(母)家庭であった。父親は家族を捨て、行方不明であるという。しかし、後で聞くと刑務所に入っているのだった。従って、家計を支えていたのは母親であった。母親は夜の務めで収入を得ていた。これは後に東彦が勇樹から得た情報である。母親は夕方六時ごろ出勤し、午前一時前後の帰宅というのが基本的な勤務パターンであった。しかし、帰宅が朝方になることも多かったらしい。

勇樹と澄江の年齢差は四歳である。澄江が出生した時点で

で勇樹は四、五歳である。この年齢で澄江の世話や家事の手伝いをやっていたことは考えられない。母親が家事、育児をやっていたか、もしくは祖父母のどちらかかもしれない。しかし、勇樹が学齢期になった六歳頃には彼の役割分担を果たしていたと思われる。

ては考えられない事情であった。しかし、考えられない事態が現実にあったのである。人間の想定などというのは実に底の浅いものである、と東彦はしみじみと感じた。

勇樹との話の中からもう一つ重要な事実が明らかになった。実は勇樹には中学二年生になる恭一という兄がいたのである。勇樹より三歳、澄江より七歳上である。澄江が生まれた時に、恭一は一年生か二年生である。もし、彼が澄江の世話をし家事も担ったとするならば、勇樹は通学できたことになる。何故勇樹が通学できなかったか、また、何故勇樹と澄江のきょうだいで転入手続きに来なければならなかったかは、恭一の現状を理解することによって明らかになった。

二人に関しては書類上の問題はなく、また、在籍校の確認もとれたので転入を受け入れた。しかし、保護者について、この場合は母親になるが、その確認はしなければならぬ。今回は特別な事情ということ、後日来校してもらうか、あるいは家庭訪問をして確認する、ということになった。

不確かながら、恭一は暴走族の仲間に入っているという。しかも、それは小学校六年生のころからであったという。あまり家にも寄り付かず、悪友たちの家を転々としていたというのである。

こんな有様であったので、母親は恭一が逃げないように監視しながら中学校への転入手続きに行ったのである。幼い勇樹の家事や育児といい、そのための不登校といい、きょうだいで二人だけでの転入手続きといい、学校側にとつ

た。勇樹は入学式を含め現在までずっと学校に行っていないかった。年教にすると四年半ほどになる。その間、多少の読み書きや、計算の仕方を誰かに教えられることがあったかもしれない。しかし、系統的な学習は全くしていない訳であるから学業の遅れは必然と思われた。また、おとなの世界との交流はあったとしても、同年齢の友だちなどの遊びなどはあまり無かったと考えられる。従って、人間関係づくりや集団行動などが円滑にいかないのではないかという懸念が持たれた。中でも喫緊の課題は学習の遅れである。しかし、澄江の場合は実質四カ月の遅れである。指導力のある教師であれば授業の中でその遅れを取り返すことは可能である。一年生の担任の中にはこれに打って付けのベテラン教師がいた。学年主任の三上光子である。

五年生の勇樹については、全ての教科を担当に任せることは無理である。そのことはだれが考えても明々白々であった。東彦は五年生の学年主任の本間純一に相談することにした。彼は四十歳という言わば油の乗り切った働き盛りであった。しかも、責任感が強く、研究意欲も旺盛で勇樹の担任には打ってつけである。しかし、責任感が強いだけに無理をしても仕事を背負いこむ癖があった。東彦は彼の気持ちを考慮しながらできるだけ負担のかからない方策を立てる必要があると考えた。そのために、担任については、教頭の前田と教務主の千藤を加えて四人で話し合いをすることにした。案の定、本間はのっけから勇樹の担任を申し出た。

「本間さんの積極的な申し出は校長さんも感謝すると思います。しかし、学年主任や研究主任の仕事も重なっている現状では他の先生の支援を考えましょうよ」

前田のことは心がこもっていた。彼も本間のことは高く評価していた。

「教頭さんのおっしゃる通りです。ただ、どうしてもというのであれば私も教務主任として何らかの形で協力したいです」

千藤のことは前田同様、本間への思い遣りがにじみ出ている。

前田と千藤のことは本間は「ありがたい」と言いながらも「勇樹の担任は私に」と懇願するのであった。彼は

「片隅のだれも注目しない、光の当たらない子こそ教育の愛を注ぐ」を座右の銘としていた。従って、彼は勇樹のような恵まれない子こそ自分が担任すべきだ、という思いに駆られたのである。

「本間先生のお気持ちは本当にうれしく、ありがたいと思います。ご負担をお掛けすることになりますが、お願いをすることにいたします。ついては、五年生という現状を考えて、国語、算数の二教科については個別指導を行うことはいかがでしょうか。担当は、教頭、教務、私の三人で検討し、決定したいと思います」

東彦は本間ができるだけ受け入れやすいような方法を提案したのである。

「ありがとうございます。そうしていただくとは何よりも勇樹くんが助かるし、喜ぶと思います」

本間はそう言うのと、深々と頭を下げた。

勇樹の個別指導については事前に教頭、教務、校長で話し合っていた。最も無理なく勇樹の担任を決める策を考えていたのであった。教務、教頭の仕事を考えた時、彼らに勇樹を指導する時間はなかった。あるとすれば校長の東彦だけであった。

「校長先生、僕はがんばります。よろしくお願いします」

土、日曜日を挟んだ九月四日、勇樹が校長室に入るなり発した最初のことばであった。誰かに教えられた訳ではないだろう。勇樹自身が一人で考え、思いついたことばに違いない。東彦は、彼の折り目正しいことば遣いに心打られた。と同時に、彼がこれまでおとなの社会でもまれて生きて来た証のようにも思えた。

「こちらこそよろしく。ところで今日は何の日かな」

東彦のことばに勇樹は怪訝な顔をして彼を見つめた。あまりに漠然とした問いかけであった。勇樹の戸惑いは当然なことであった。

「ええ、今日は・・・何曜日ですか」

彼は窮したようにことばを絞り出した。

「突然、捉えどころのない質問をしてしまったね。ごめん」

東彦が全て言い切る前に勇樹の顔がぱっと明るくなった。

「初めて学校に来て授業を受ける日です」

「そうだ、その通りだ。初めての小学校、入学式だ」

東彦は勇樹が彼の期待した通りのことばを発しようとは思ってもしなかった。そのため、驚きの声となったのだ。た。

「入学式ですね。僕はこのことをすっかり忘れていました。

でも、こうやって校長先生と向き合って入学式と言われて僕はとてもうれいす。いつまでも忘れません。本当にありがとうございます」

涙をためた顔でそう言うことばを聞いて、東彦も胸が詰まる思いであった。

こうして勇樹の学習指導は、当初の予定通り校長の東彦が担当することになった。国語と算数の二教科である。初日、東彦は勇樹の学力を把握するために二桁の繰り上がりのない足し算とある足し算、それに、一年生の国語の教科書の読みをさせた。繰り上がりのある足し算と漢字の読みはできなかった。思った通りであった。

勇樹も出来の悪かったことを恥ずかしく、あるいは悔やんでいる様子であった。そんな勇樹を励まそうと思った。

「最初はだれでもできないものだよ。しかし、毎日コツコツと取り組んでいけば必ずできるようになるから。『ちりも積もれば山となる』という諺がある。そのことばを励みにして頑張って行こう」

「分かりました。僕は一年生のつもりで努力していきます。校長先生、これからよろしくお願いします」

と言いながら頭を下げた。

「先程から感心して聞いていたのだけど、勇樹くんはこと

ば遣いも、礼儀もとても正しいね。正しいことば遣いとかなことだ。そこには相手を尊敬する気持ちが込められているからだ。勉強も大切だけど相手を思い遣り、尊敬する気持ちがあるということは、人としてとても素晴らしいことだ。この点で君はもう五年生を通り越して六年生だよ。自信を持って行こう」

勇樹が少しでも自分に自信を持ってもらおうという気持ちから東彦が述べたことばであった。しかし、それは東彦の真実の気持ちでもあった。

「分かりました。今日は校長先生からたくさんのお話を教わりました。先生のこのことばを大事にしていきたいと思います。僕はこの桜が丘小学校に入学できて幸せです。これからもどうぞよろしくお願いします」

頭を下げる勇樹の顔の表情はにこやかで、晴れ晴れとしていた。

廊下から複数の足音が聞こえて来て校長室の前でその音が止まった。そして、ドアをノックする音がした。

「どうぞ」

東彦は大声で返事をした。

すると、「失礼します」と言いながら入って来たのは女子三人、男子二人の児童たちであった。その姿、格好から

高学年児童たちに違いなかった。彼らは入り口の所で並んで、

「校長先生、私は五年一組の太田智子です。私たち五名で畠山さんを迎えに来ました」

智子のことばは実に明瞭であった。

彼女のことばを聞いて東彦はまさかと思った。初めての学校、初めてのクラスメイトと初めて尽くしの環境で、勇樹の心は不安と緊張でいっぱいであるに違いない。こんな心理状態にある勇樹を「迎えに来る」という行為は、勇樹の心を癒す最上のものである。東彦はなんて心のこもった心遣いなのだろう。一体だれが考えたのだから、と驚愕したのである。担任の本間の心遣い、と東彦は思った。勇樹もポカンとした表情で太田たちを見つめていた。

「それはご苦労様です。ちょうど今、勉強が終わったところです。それにしてもみなさんがこうして畠山くんを迎えに来てくれるなんて本当に驚きです。畠山くんも感激でいっぱいだと思います。また、太田さんの挨拶も素晴らしいですね。しかも、他の四人の皆さんも立派な態度で、私はとてもうれしいです。この学校に、あなたたちのような人がいることは私の誇りでもあります。本間先生のご指導ですか」

東彦のことば遣いも自然、丁寧になっていた。

「ところでこれから給食時間が始まるね。畠山くんの方は用意できているかね」

「校長先生だいじょうぶです。今日、欠席の子がいますのでその子の分を畠山さんに食べてもらいます」

勇樹たちの給食については、彼らはまだ給食人数に算入されていないからである。

彼女は堂々とした態度であった。そして、言外には「校長先生心配ご無用ですよ」というニュアンスが込められているようであった。

「そうですか、そこまで配慮してくれているのですね。何かから何まで行き届き、私は感心し、感動しております」

「ありがとうございます、先生。新しい人が学級に入ることとは新しい空気が学級に注入されることと同じだと思います。それは同時に学級の活性化の始まりでもあります」

太田の話しぶりは教師顔負けであった。東彦は思わず襟を正してしまった。小学校五、六年生ともなるとすっかりとした考えを持ち、弁舌も爽やかという子が少なからず存在する。太田もその例と言えよう。

「勇樹くん、今日から給食が食べられるぞ。担任の太田先生やクラスの友達のお陰だよ」

「給食」と聞いて、勇樹の顔の表情が明るくなった。「ホントですか。給食って初めてです。ずうっと食べたい、

「はい、本間先生が校長室にいる畠山くんを『どこのグループにしようか』と、私たちに相談されました。それで私たちは話し合い、私たちの班に入ってもらうことにしました。これはクラス全員の同意によるものです。それで歓迎の意味も込めて迎えに来ました」

「なるほど、それはすばらしいことですね。それに、五年一組全員が勇樹くんを迎えてくれて私もうれしいです。勇樹くんよかったですね」

東彦と迎えの子どものたちの会話を聞いていた勇樹は驚き、そして心を揺さぶられたようだった。彼はこのような形で同学年の、しかも複数の子たちと会うのは初めてである。

緊張し、気後れもあっただろう。しかし、迎えを受けた彼の心は喜びでいっぱいになったに違いない。もしかしたら人としてこれほどに大切にされ、厚遇され、尊ばれた経験は初めてだったのかもしれない。

「はい、校長先生、僕はびっくりしました。まさかクラスの人たちが迎えに来てくれるなんて思いもしませんでした。本当にうれしいです。この学校に来てよかったと心から思っています」

東彦の「勇樹くんよかったですね」に対しての勇樹のことばであった。東彦はそのことばを聞いてほのぼのとした気持ちになった。しかし、はっとなった。

食べたいと思って来ました。まさか今日から食べられるなんて思わなかったです。うれしいです」

「そう言いながらことばを繋いだ。
「澄江も食べられるでしょうか」
遠慮がちな口調だった。

「もちろん、担任の三上先生がしっかりと準備をしているから心配することはないよ」

それを聞いた勇樹の表情にホッとしたものが浮かんだのを東彦は見逃さなかった。妹を思いやる勇樹の心遣いに東彦の目はうるんだ。

「じゃあ、五年一組のみなさん、勇樹くんをクラスに案内してください。クラスに帰ったらみなさんに私からの『ありがとう』も伝えてください」

「分かりました。それでは失礼します」

太田のその言葉に続いて残りの子たちも「失礼します」と声を揃えて言った。そして、一人の男の子が勇樹の手を取り、校長室から去って行った。それがいかにも自然な振る舞いであった。彼らが去った後の校長室の空気は温かく、清々しくもあった。手をつながれた勇樹の顔にはうれしそうな微笑みが浮かんでいた。その様子を見ながら東彦はふと気が付いた。勇樹は「ありがとうございます」とか「うれしい」ということばを使うことや笑顔を浮かべることが

多いことを。それは天性ではなく、恐らくこれまでの育ちの中で形成されたのだろう。彼の笑顔は接する者に親近感を持たせ、後押しをしてあげたくなる心を沸かせる。これらは、彼のこれからの人生に大きな助けと幸を呼ぶに違いない、と思った。

案の定、勇樹の学習は遅々としたものであった。記憶力がとぼしく、今日学習したことが翌日には忘れていく、ということしばしばであった。例えば掛け算九九がそうである。多くの子は六の段以上は覚えにくい。しかし、数回の暗唱で身に付くことが多い。繰り返り下がりのある引き算にしても同様である。国語の漢字にしても音、訓を含めて複数の読み方があるのだが、そのこと自体が理解できない。従って、漢字に対する学習意欲が湧かないのであった。

東彦が指導をしているうちに気付いたのは、できるだけ勇樹の生活と結び付けた指導が大切であるという当たり前のことであった。また、学習課題を欲張らず、簡単なことを繰り返して学習し、自信を持たせることであった。

当初、東彦は勇樹の物覚えの悪さに呆れ、落胆し、怒りの声さえ上げてしまったことがあった。彼はそれに対し、実にすまなそうな顔で「ごめんなさい」「すみません」と頭を下げた。その姿に東彦ははっとなった。彼が悪いので

うことばもあるからね」

勇樹に言い聞かせようと話し始めたのだが、次第に東彦自身に語り掛けていることばとなっていくた。

「分かりました。諦めないでゆつくりがんばります」

勇樹の緊張した表情は消えていた。今まで彼の切り替えの早さを何回か見て来た。これは彼のまだ短い人生の中で学び取った処世術なのであろう。こうすることで彼は彼の人間関係を円滑にして来たのだろう。

しかし、彼の「見捨てないでください」ということばに東彦は内心驚いた。おとなでさえ滅多に口にすることばではない。追いつめられ絶体絶命の場面でのことばである。この彼のことばに嫌味やわざとらしさは微塵も感じられない。ごく自然に彼の口から発せられた。やはりこのことばも彼のこれまで過酷な人生の中で身に着けたのだろう。そう思うと、東彦は不憫さを感じざるを得なかった。

そう考えると、勇樹に対する東彦の対応はずっと穏やかに丁寧になっていった。そして、二人の間に学習以外の話題での会話も増えていった。冗談を言ったりして笑い声が起ることも多くなった。これまでにはなかった質問や愚痴さえも言うようになった。勇樹の東彦に対する親近感が深まったのだろう。

これらに比例して勇樹の学習能力も上がったかというのと、

はない。東彦の指導が未熟であり、勇樹の実態の理解不足がもたらしたことであったのだ。東彦は彼に申し訳ないことをしたと後悔し、自己嫌悪にさえ陥った。

「大きな声を出してごめん、先生が悪かった」

思わず謝ってしまった。

「先生、悪いのは僕です。その時は分かったと思っても、朝起きるともう覚えていないのです。僕の脳が悪いのですもつとがんばります。僕を見捨てないでください」

勇樹はそう言うのと、深々と頭を下げた。

東彦は勇樹の健気なさ、謙虚さに心を打たれずにはおられなかった。そして、十一歳の少年とはとても思えない彼の心の大きさに感心させられ、また、教えられた。同時に、逆境とも言える環境の中で、このような優れた資質を形成したこと感嘆せざるを得なかった。

「勇樹が悪いとは誰も思わないよ。ただ、今までこのような学習は全くして来なかったの、頭がまだ慣れていないのだと思う。野球で言えば、全然やったことがないのにいきなり打ってみるとか、キャッチボールをしてみると言われても直ぐにはうまくできないだろう。少しずつ簡単なことから初めて練習を重ねればホームランも打て、むずかしいボールも取れるようになるね。もう少しゆつくりとやっ

残念ながらその成果はあまり見られなかった。しかし、わずかではあるが、理解力が増し、学習意欲も衰えてはいなかった。これらは、クラスでの楽しい体験や友人が増えたことも関係しているようであった。彼の言動が生き生きとなって来たからである。自然、東彦が勇樹を褒めることも多くなった。

九月も半ばを過ぎ、学校全体は運動会の練習で活気にあふれていた。残暑の厳しい日々が続いたが、さしたる事故もなく、どの子も運動会を楽しみにしているようであった。勇樹の妹の澄江もすっかりクラスに溶け込み、休み時間、校庭で友達と嬉々として遊ぶ様子が時折見られた。東彦はそんな兄妹を見て安堵感を覚えた。ただ、未だに彼らの母親と面談どころか連絡さえ取れていない状況に一抹の不安を感じていた。

運動会が一週間後と迫った日のことであった。東彦は市の教育委員会に提出する急ぎの文書作成のためにいつもより三十分ほど早く出勤した。車を駐車場に置き、職員玄関に向かうために外階段を上っていった。すると何やら子どもの声が東彦の耳に届いて来た。「子どもにしては早すぎるな」と思いながら歩を進めた。すると、おとなの声も聞こえる。「用務員の善一さんだな」と、直ぐに分かった。階段を上り切る前に彼らの姿が見えた。やはり善一さんで

あった。子どもは勇樹と妹の澄江であった。彼らの会話は笑い声も交じっていた。「勇樹たちに何かあったのかな」という不安は、会話の明るさからこの懸念は自ずと消えた。が、「どうしてこんなに早く登校したのか」という疑問は消えなかった。

「おはようございます」と、東彦が彼らに声を掛けた。彼らも東彦の方に顔を向け一斉に「おはようございます」と挨拶を返して来た。いつもの元気な明るい声であった。「勇樹くん、澄江ちゃん、随分早い登校だね。どうしたの」

東彦は抱いた疑問を投げかけた。

「校長先生、勇樹くんたちは時計の時間を見間違えてしまつて早く学校に着いてしまったらしいです」

善一さんが笑顔で答えて来た。

「すみません、校長先生。僕たち寝坊したかと思ひ、急いで学校へ来てしまいました。学校に着いてみると誰もいないのでどうしたのかな、と思っていました。そうしたら善一さんに会い、登校が早すぎたことを知りました。でも、善一さんといういろいろお話ができてうれしかったです」

勇樹は子どもながらに物事を前向きに捉えている。普通なら遅刻か朝食かを選べと問われたなら朝食を取るだろう。また、登校が早すぎたことにしても先に口から出るのは

「後悔」であろう。しかし、勇樹は「善一さんと話が出来てうれしかった」と言うのである。東彦は勇樹のこの人柄

をかけたがえのないものであり、大事に伸ばしてやりたいものと思った。

「しかし、遅刻するよりはずっとまだよ。それに昔から早起きは三文の得というから。実際にこの諺の通り、早く来たお陰で善一さんと友だちになれたじゃないか。よかったよ」

「はい、校長先生の言う通りです。今度、善一さんに包丁の研ぎ方を教えてもらうことになりました」

それを聞いて東彦はそんなことまで話題が及んでいたのかと半ば感心もし、驚きもした。調理をする勇樹は、何かの拍子に自分の使っている包丁の切れないことを話したのかもしれない。勇樹が楽しそうに答える様子を見て、東彦は何かほっとするものを感じた。同時にある懸念が脳裏に浮かんで来た。その思いが口を衝いて出た。

「さあ、それでは昇降口から入って校長室に来て」

東彦は校長室のドアを開けた。静かな空気がふつと動いたような気がした。頭を上げると壁に掲げられた歴代の校長の顔写真が東彦を見下ろしている。東彦もいずれこの列にはいるはずなのだが、いつになっても気持ちに馴染まなかった。

「ちよつと心配していることがあるのだけだ」

そう言うと、東彦は勇樹たちを会議用機の椅子に座るよりに勧めた。

「こんなに早く来て朝ご飯は食べて来たの」

東彦が心配していたことであった。

勇樹は一瞬、はつとしたような表情になった。そして目を落とした。

「朝ご飯を食べていないことを怒っているのではないよ。まだ食べていないのではないかと心配しているのだ」

東彦のことばに勇樹は顔を上げた。その顔には先程の沈んだ表情は消えていた。

「はい、本当はまだ食べていないのです。朝、目が覚めたらおかあさんはまだ帰っていませんでした。お兄ちゃんはまだぐつすり寝ているし、時計を見たらもう八時近くになっています。寝坊したと思ひ、直ぐに妹を起こし、着替えさせました。もう食べている時間はないと思ひ、家を飛び出して妹と一緒に走って来ました」

確かに勇樹の額の辺りには汗らしきものが、まだ微かに浮かんでいた。東彦が思った通り、彼は朝ご飯よりも学校を選んだのであった。勇樹の健気さに東彦は心打たれた。

「少しの間校長室で待つてくれる。先生、お使いに行つて来るから。もし、教頭先生が来たら『校長先生にここで待

つていなさい』と言われた、と答えておいて。直ぐ戻るからね」

東彦は学校の裏通りにあるコンビニに急いだ。お客が四、五人レジの前に並んでいた。店は朝から活気を呈していた。彼はおむすび四個と水のボトル二本を買うと、急ぎ学校に戻った。今日も子どもたちには運動会の練習が待っている。九月の日差しは射るような強烈な時もある。朝ご飯抜きの身体は給食時までとても持ちきれない。日射病（熱中症）など起こしたら大変だと東彦は考えたのである。

彼は勇樹たちを校長室の真向かいにある教育相談室に誘った。この部屋は通常施錠されて、しかも無人である。他の児童たちが登校してきても勇樹たちの食事が邪魔されることはない。

「おむすびを食べ終わったら教室に戻りなさい。ボトルとごみは隅のごみ箱に入れておいていいから。それと、おむすびを食べたことは誰にも言わないでね。みんなが知って『私にも、僕にもちょうだい』と言われたらたいへんだから。それと、今日みたいに朝ご飯を食べてこない日があったら校長先生が教頭先生、または教務主任の千藤先生に話すんだよ。朝ご飯抜きは、成長期の君たちの健康にとってもよくないからね」

勇樹たちは口の動きを止めることなくうんうんとうなず

ームがつきまして。『やり過ぎではないかという声が出ています』

いかにも言いにくそうな前田の口調であった。教頭という立ち場として前田は、報告に来た教員の意見を校長へ直ぐに話すべきかどうか悩んだに違いない。

そう言いながらも「校長さんの勇樹たちへの対応が悪いというわけではありません。『やり過ぎ』というだけの話です」

そう言いながら前田は手を胸の前で幾度も横に振った。前田の話を受けながら千藤が口を開いた。

「校長さんとしたら緊急的な救済手段だったのだろうと思います。それについては正面から文句は来ないでしょう。しかし、不公平だ、やり過ぎだという批判は起きると思います。また、朝食を摂らないで登校してくる児童は恐らく勇樹たちばかりではないと思います。もし、『朝食欠食児童全員に給食せよ』という声が上がったら対処できません。今日のことは『緊急対処』ということにして、『今後はこのようなことはしない』とした方がよいですね」

前田に引き続き続いての千藤のことばであった。二人とも東彦への配慮を見せつつも厳しい批判を含むものであった。東彦は、時に情に流されがちな自分の弱さをずばり突かれたと思った。だからと言って腹を立ててはならないと堪え

いていた。余程空腹だったのであろう。澄江には二個のおむすびが多いかなと思ったが、様子を見ている限りそんな懸念は無用のようであった。東彦はほっとしながら校長室に戻った。そして、既に出勤していた教頭の前田と教務主任の千藤に事情を話した。

放課後、児童の下校も終わり学校は急に静寂を取り戻す。東彦は彼のデスクでゆったりと椅子にもたれながら運動会の挨拶文を考えていた。小学校は一年生から六年生まである。その年齢差は大きい。従って彼らの理解力にも格差が出てくる。全員の児童が理解し、その上行事にふさわしい心に残るような話をしなければならぬ。そんなことを思い浮かべながらあれこれと考えを巡らしていた。

トントンとドアを叩く音がした。校長室と職員室の間のドアである。前田と千藤が「失礼します」と言いながら校長室へ入って来た。

東彦は「教頭、教務主任二人そろって何かな」と思いながら「どうぞ」と言い、椅子を進めた。座った二人はいつになく沈黙している。「何か難しい問題でも起きたのか」と、東彦は気持ちに影が差しこんで来たような思いにとらわれた。

「実は」と言いながら前田が重い口調で話し始めた。

「今朝の勇樹たちへのおむすびの件ですが、ちよつとクレ

た。彼らは学校経営の長としての過ちを指摘してくれているのだ。場合によっては、彼らの意見が校長の心情を害し、彼らの立場を危うくすることもあるのだ。そんな懸念を承知で彼らは校長が煙たく思うような意見を述べたのである。東彦は彼らの意見を素直に受け入れるべきであると思った。それどころか感謝をすべきであると考えた。

「勇樹兄妹への対応はやはり思慮が足りませんでした。お二人のご指摘は最もなことです。反省をしております。今後とも気が付いたことがありますら、ご指摘下さい」

東彦は率直にそう言うと、頭を下げた。

前田も千藤も心なしかほつとしたような表情であった。安堵感からだろう、千藤は「もう一言よろしいですか」と言い、話し始めた。

「実は勇樹の言った『時計を見間違えた』ということですが、見間違えたということも十分考えられますが、しかし、まだ時計の読み方が不十分ということも考えられます。彼の日常生活に直接かわることですので確かめておいたほうがよいと思います」

東彦は虚を突かれた思いであった。千藤の指摘の通りだと思った。

「私もそのことは疑問に思っておりました。千藤さんの言われる通りだと思います。日常生活に欠かせない時計の見

方は正確に身に着けておかねばなりません。五年生の勇樹です。時計の読み方はそれほど時間を取らずに習得できると思います」

東彦は前田の話に素直にうなずいた。時計の読み方の指導をして来なかったのは東彦の落ち度であった。限られた時間での指導である。つい、計算や読み書きに多くの時間を割いてしまっていた。

「おむすびの提供と言い、時計の読み方の未指導と言い、私の落ち度でした。お二人の適切なご意見ありがとうございます」

東彦は素直に謝罪し、感謝をした。

「いやあ、そんなふうに校長さんに頭を下げられますと私の立場がなくなってしまう。忙しい身で個別指導までやっていたら私の方こそ感謝しております。私たち三人、チームプレイでがんばっていきましょう」

前田の前向きなことばに東彦も千藤も大きくうなずいた。それぞれがわだかまりなく子どもたちの指導に関わっていくことが最善である。東彦は、今後の学校経営に明かるい日差しが差し込んで来るのを感じた。運動会は三日後に迫っていた。その日の天気予報は晴れで、最高気温は二十八度であった。九月末にしては異常な気温の高さである。天気が良い子どもたちの日射病を心配しなければ

行つて母親だけになる、と想定したからである。

十時ごろ、本間が本部席のあるテントに向かって来るのが見えた。その姿を認めた東彦は母親が来たことを確信した。本間の表情には笑みが浮かんでいたからであった。

「校長先生、予想通り母親が見学に来ています。お昼に案内します」

本間は校長の耳元でそう小さな声で伝えると直ぐに戻つて行った。

プログラムは予定より早く進行した。そのため昼休み開始時刻は予定より十分ほど早くなった。

校庭の遊具は全てロープなどで縛り、動かないようにしていた。遊ぶ用具は一つもない。しかし、校庭はいつもの光景から一変していた。普段目にするのではない多くの老若男女、ざわめき、そして言い知れぬ興奮、いわば異次元の世界と化していたのである。子どもたちは物珍しそうに化粧した運動場を巡り、また、子ども同士でじゃれ合い、追いかけてっこをしたりしていた。運動場の真中には赤と白の割れた鈴玉が立っていた。鈴玉からは色とりどりの紙テープが風になびいていた。鈴割は午前の部最後の競技であった。低学年の子たちは、嬌声を上げながら訳もなく子犬のようにぐるぐると駆け回っていた。

東彦は昼食を摂ると直ぐに本部テントの中の椅子に座り

ならないほど事態である。東彦は日射病対策として水筒持参と紅白運動帽着用用の徹底を図らなければならないと思つた。また、万一に備えて養護教諭らと十分な打ち合わせを行うことにした。そして、そのことを明日の朝の職員打ち合わせで職員に伝えることを教頭に依頼した。

予報通り、運動会の日には朝から快晴であった。好天のおかげもあって、プログラムは順調に進んでいった。また、幸いなことに体調を崩す児童も出ていなかった。しかし、東彦には一つ懸念すべきことがあった。それは勇樹の母親が見学に来るかどうかということであった。これまで担任の本間が電話連絡をしたり、手紙を届けたりしていたが、通じたのは電話での一度きりであった。それも「取り込み中なので後で」と言つてすぐ切られた。その後は梨の礫である。だが、さすがに運動会には顔を見せるはず、と東彦たちは踏んでいた。それを前提に東彦は本間と綿密な計画を立てていた。

本間は勇樹を通して母親の来校を確認する。確認出来たら校長へ連絡し、昼休み時の昼食開始後二十分ほどしたら母親のいる場所まで本間と校長で行き、今後の連絡体制をしっかりと確認する、などであった。昼食開始から二十分後としたのは、その時分には勇樹たち子どもたちは遊びに

本間を待った。直に彼は姿を見せた。

「食事は済みましたか」

生真面目な本間である。時間に合わせようとし、食事をしていないことを東彦はおもひがかったのである。

「はい、済みました」

本間のことばに東彦はにこりとした。

「これからご案内します。校長先生にご苦労をお掛けし申し訳ございません」

本間は相変わらず謙虚で、しかも丁寧である。

東彦は「先に本間さんから母親に挨拶してくれますか」などと話しながら彼に付いて行った。

彼は「校長先生、勇樹の母親だけでなく男性の方も一緒です」と突然話して来た。予想外のことであったが、東彦はいい機会であると思つた。運動会に来るといふことはそれなりの関係を持つ間柄であるに違いない。

「そうですか、その男性と知り合いになっておくことは今後何かと役に立つことがあると思います。丁寧に挨拶をしておきましょう」

東彦の話に

「はい、おっしゃる通りですね。敢えてうとんじることもありませぬ」

本間の言い様はぞんざいであった。生真面目な本間には

母親と男性のような関係は許せなかったに違いない。

日差しが強いせいか、多くの保護者達は、校庭の隅に茂る樹木の下にビニルシートを敷いて昼食を摂り、また談笑をしていた。しかし、日傘を差し、児童席の後ろで食事をしている保護者も結構いた。

「あそこです。白い日傘を差しています」

本間の指さす方に東彦は目をやった。準備良く日傘を立てる用具まで用意している。その日傘は表面が白く、裏面はブルーであった。日傘などに縁のない東彦にも高価なものであるということは想像できた。その日傘の下で二人は向かい合って座っていた。勇樹も澄江もすでにどこかへ遊びにいったのだろう。姿は見えなかった。男性は東彦の方を向いていた。年の頃四十半ばに見えた。よく見ると座椅子にもたれかかり、ふんぞり返っていた。足は無造作に投げ出されており、それが男の性格のだらしなさを物語っているように東彦には思えた。しかもシャツのほだけたところからちらりと刺青らしきものまで見える。東彦はただならぬものを感じた。しかし、刺青が見えたという事だけで人柄を判断することは避けるべきだ、と東彦は思った。東彦には外見でその人を判断し、苦い思いをした経験がいくつもあったからである。

学校では、各家庭から「家庭環境票」と言うものを提出ら「初めまして、畠山です。畠山修子です。子どもたちが大変お世話になっております」と言うのと、ゆっくりと頭を下げた。

東彦は、上げたその顔を見て驚いた。どう見ても二十台後半の若さには見えないのである。長男の恭一を二十歳で生んだとすれば三十四歳である。とてもその年齢とは見えなかった。しかも目鼻立ちが整い、肌も白くスタイルもよかった。年齢と言いつつ、容貌と言いつつ、向かい合っている男とはどう見ても釣り合いが取れなかった。

勇樹の断片的な話、また、彼らの生活の様子から、彼の母親は、日々の生活に追いまくられ、やつれている姿しか東彦には想像できていなかったのだから、ところが、現実には彼の想像とは真逆であったのである。東彦は己の女性観の乏しさ、世の中を見る目の不確かさ、甘さを思わずにはおれなかった。同時に、この男女二人への怒りがこみ上げてくるのを抑えようがなかった。

「初めまして、校長の渡辺と申します。畠山修子さんでいらつしやいますか。それと、そちらの男性の方はおとうさんで……」

東彦はわざと話を男へと振った。というより悪意を込めた挨拶をしたのだった。男への嫌がらせでもあった。

「いやああ、私は……」

してもらっている。その記入内容は、家族構成、住所、緊急時の連絡先、家庭から学校までの略図などである。家庭訪問や児童の在校中の急な発病などに対しては必須のものである。ところが、勇樹の母親からは未だ提出されていなかった。ただし、母親の名前だけは勇樹に聞いて承知していた。修子と言う。

恐らく修子と思われる背中の女性は並べられている料理を箸で取り、男性の口元にそれを運んでいるところであった。「パパどうぞ」という声が東彦の耳元に届いた。無表情のままの男は口を開き、それを受け止めようとしていた。ぞろりと見えた歯が黄色く染まっていた。「かなりのヘビースモーカーだ」と瞬間、東彦は思った。

「失礼します。畠山さんでいらつしやいますね」

本間が声を掛けた。

声を掛けられた女性はぱつと振り向いた。肩にかかるほどの茶色の髪がさつと後ろになびいた。女性は振り向き、そして「はい」と答えた。

「勇樹さんの担任の本間です。そして、こちらが校長です」

東彦は軽く会釈した。

それを見た女性は、あわてたように立ち上がった。そして、皺が寄り、裾がめくれたスカートを両手で伸ばしながら

男はまさか自分にも声を掛けられようとは思ってもしなかったのだろ。しどろもどろの状態であった。東彦は男のうろたえている様子を冷ややかに見下ろしていた。

「あつ、校長先生、こちらは親戚の者です。子どもたちの運動会をぜひ見たいというものですから一緒に来ています」

修子は慌てて口を挟んで来た。

「それは大変失礼しました。本日はお忙しい中、お出でをいただきありがとうございます。どうぞゆっくりご覧ください」

東彦は先程とは違い、丁寧に言うと、修子の方に向き直った。男は無然とした表情で東彦を見つめていた。何か言い返そうとしたのかもしれない。それを東彦に拒絶されたと取ったのであろう。しかし、東彦は男を無視した。そして、修子の方へと視線を向けた。そして、「どうぞお座りください」と、声を掛け、本間にも促し腰を下ろした。

「おかあさんの修子さんですね。担任からこれまで何度か電話や手紙を差し上げました。しかし、お返事はいただけませんで、残念でした。大事な家庭環境票も未提出です。また、給食の口座引き落としの手続きも終わっていません。さらに教材費の支払いも完了しておりません。これらの手続きが総ておりません」と家庭、学校双方に不自由なこ

とが起りかねません。どうか大至急手続きをお願いしませぬ」

東彦は、今後母親と直接話し合うことがないことも考え、きつい言い方ではあったが率直に話した。

本間はそれを聞きながらしきりにうなずいていた。「よくぞ言ってくれた」という思いがあったのかも知れない。

「はい、本当に申し訳ございません。実は新店舗開店の準備で忙しくしております、子どもたちにも不自由をかけております。書類などは直ぐに提出いたします」

修子はいかにも申し訳なきそうに深々と頭を下げた。

「ご存じだと思いますが、勇樹さんは勉強の遅れがありません。特に国語と算数については他の児童たちと一緒に学習することは困難です。そこで、この二教科については校長先生に特別に個人指導をしていただいております」

本間のこの話を聞いた途端、修子の表情に緊張が走った。「そうですか、そうだったのですか。申し訳ございません。ちつとも知りませんでした。ところで澄江はどうなのでしょうか」

勇樹は自分が校長から個別指導を受けていることを話していなかったのだ。このことを話す機会があったはずである。個別指導と言う特別扱いを恥と思つてなのか、逆に誰にも知られたくない喜びとして隠しておきたかったかどうか

かは東彦には定かではなかった。しかし、このことは深く触れない方が勇樹には良いと判断をした。

修子は子どもたちの学校での様子をあまり掴んでいない様子であった。しかし、仕事にかまけ、子どもたちの普通の生活に無頓着なのは許せないことだ、と本間は憤りを感じた。

「今、一年生の澄江さんの話が出ましたが、澄江さんは他の児童と一緒に授業を受けております。担任の三上先生が熱心に指導されています。ご安心ください。なお、三上先生も挨拶に来る予定でしたが、子どもたちのひとりが気分を悪くし、今、保健室で様子を見ています」

「そうですか。勇樹同様に澄江にも心遣いをいただき本間にありがたいことです。どうぞ三上先生にはよろしくお伝えください」

修子は、東彦のことばにほっとしたような表情で答えた。なんとと言っても二人の子どもは自身がお腹を痛めて生んだ子たちである。気遣うのは当然だとしても、そのことばを聞いた東彦も本間もほっとした気分になった。

「勇樹くんたちは彼らだけで生活をしている日もあるようです。おかあさんはご存じですね。十分な食事ができなかったり、お風呂に入ることができなかつたりすることもあるようです。お仕事がお忙しいのは分かります。しかし、

まだ小学五年生と一年生のお子さんたちです。あつ、中学二年生のお兄さんもいましたね。いずれもお子さんたちだけで過ごすのは心配です。突然の病気がありますからね。他人である私が口を出すべきではないと思います。しかし、まじめに一生懸命勉強し、学校の生活を楽しんで二人を見ますと、とても気がかりでなりません」

日頃の本間に見られない姿であった。彼はこの間、疑問に思っていたことを遠慮することなくズバズバと言ったのである。

「本間先生、本当に先生には感謝しております。先生のことは勇樹からしょっちゅう話を聞いております。友だちもたくさんで、学校が楽しくてしようがないと言っております。どうぞよろしく願います」

そして、手をつきながら頭を下げた。髪がさらりと下に落ち、陽が当たった。頭を再び上げると、両手で髪を束ねるようにして肩の後ろに撫で揃えた。茶色に染めた髪が陽に照り返り、明るく輝いていた。指の爪は薄いピンクに染まっていた。

「子どもの普段の生活までご心配をいただき申し訳ございません。私としてはそれなりに配慮をしているつもりなのですが、行き届かないこともあるかと思えます。今後、一層気を付けます。先ほどもお話をしましたが、新規開店業

務でとにかく二十日ほどは忙しくしていました。そのため、子どもたちに十分な目配りができていませんでした。忙しいピークも過ぎましたのでこれからは子どもたちに不自由をかけません」

東彦は修子を追い詰めるようなことはしたくなかった。

そして、この場はそういう場ではなかった。今日は修子と顔合わせをし、連絡を取り合うことを確認する場であった。「おかあさんおひとりでお子さんたちを育てていくのは大変だね。そして、お仕事の事情もよく分かりました。しかし、お子さんたちもそれぞれ成長盛りです。体ばかりでなく心のケアもとても大切です。特に肉親の愛情が必要とされる時期です。学校としてもできるだけの支援をしてまいります。お子さんのことで心配事がございましたら担任の三上、本間に気兼ねなくご相談ください。遠慮は無用です」

修子は首をうなだれ、東彦の話に聞き入っている様子であった。その姿を目にした東彦は「母親だけを責め、求めるものではないな」と、心の中でつぶやいた。そして、視線を男に向けた。男はいつしか伸ばした足をあぐらに変えていた。

「親戚のおじさんでした。勇樹くんたちをどうかよろしく願います」

そして、東彦は深々と頭を下げた。それに和して本間も頭を下げた。
「はい、分かりました。こちらこそよろしくお願ひします」

そう言いながら男はあぐらから正座に座り直し、頭を下げた。東彦たちの真心と熱意が少しは通じたようであった。花柄のレジャーシートの上には巻きずし、お稲荷さん、煮つけ、卵焼きなどのごちそうがまだ残ってあった。修子はこれらのご馳走を男だけのために作ったものではない。勇樹や澄江たちのためにも作ったに違いない。それは母子関係のまだ切れていない証だ。例えそうでないとしても、東彦はそう思うことにした。

二人はその場を辞した。そして、東彦は本部席、本間は子どもたちの所へ向かった。東彦は何気なく上空を見上げた。「まぶしい」と一瞬目を閉じた。ややしばらくして目を開けた。厳しい日の光に目が慣れると青い空が高く、高く広がっていた。その中心に米粒のような物体がぴかりと白く光っていた。よく見ると飛行機であった。飛行機は飛んでいるというよりは、まるで浮かんでいるようであった。それでも目を凝らしてみると、やはりゆっくりとだが動いていた。その後ろには定規で引いたような真っ直ぐな飛行機雲が続いていた。最後は青空に溶け込んでいた。

「海と川は彼が自慢をしたときである。
「炭火で焼くとかガスコンロで焼くとか？」
「何で焼くか、という手段ではなく、魚のどこの部分から焼くかということです」
「どこから焼くかと言われても魚の腹とか背中とかしか思いつかべないなあ」
東彦には勇樹の質問があまりにも常識的で簡単と思えた。なにか裏があるように思えた。
「魚の部分といっても頭や尻尾から焼くなんて誰も思いもしないしなあ」
東彦の口からこんなことばが漏れた。

思案に暮れた様子の東彦を見て、勇樹は気の毒に思ったのだろう。表現を変えて来た。
「海と川の魚では最初に焼く場所が違います。さて、どう違いますか」
二択の問題である。簡単であるが難しい。東彦は思わず「うーん」と唸り、腕を組んでしまった。
それをいかにも楽しそうに勇樹は眺めていた。勉強での敵を魚で討つたぐらいの気持ちだったのかもしれない。
「先生、答えを言いますね」と、勇樹はうれしそうに言うのであった。彼の意図を理解した東彦は「ここは勇樹に花を持たせるところだな」と思い、「頼むよ」言った。

「時は動く」、突然そんな言葉が脳天を走った。東彦は「無駄に見えることでも諦めず努力しよう」そう思いながら本部席のあるテントに向かった。

校庭の東門から入ると左右にイチヨウの原木が五本ずつ整然と並んでいる。気温の高い日が続いたせい、十一月の終わりになってもイチヨウの落葉も少なく、形のよい三角形を保っていた。葉は豪華できらびやかな黄金色を誇っていた。樹齢は三十年ほどになるこの年、初めてギンナンの実をつけた。東彦たちは吉兆だと言いつつ合っていた。

勇樹の算数の学習も掛け算を終え、割り算に入っていた。当初に比べると理解力も記憶力も向上してきた。自身の進歩が自覚できると、当然ながら勇樹の学習意欲は増して来ていた。東彦も勇樹の理解力や学習意欲が高まるにつれ、教えることが喜びとなり、意欲も高まっていた。

母親も以前ほど帰宅が遅くはならない様子で、それを話す勇樹の顔には笑顔が浮かんでいた。その笑顔が実情を如実に物語っている。東彦はほっとした。

時折、学習の間に雑談に及ぶことも多くなった。
「校長先生、魚には海と川の魚がいますが、それらの魚の焼き方を知っていますか」
勇樹が鼻をうごめかしながら東彦に問うて来た。こんな

「海は魚は身からで、川の魚は皮からです。『どうしてか』聞かれましたもその理由まで僕は分かりません。でもその覚え方は分かります。ウミのミは身、川のカワは皮という理屈です。頭のことばを取って覚えるとよいと思えます」
東彦は「なるほど」と思った。彼には勇樹の言ったことは初耳であった。
「いや、参った。どこでそんなことを覚えたんだい」
東彦はその出所に関心を持った。
「魚屋さんです。いつも魚を買いにいつている魚屋さんの親父さんに教えてもらったんですよ」
勇樹は淡々と述べた。東彦は勇樹が家事などを通して、彼の同級生たちの何倍もの多様な人々とながっていることを改めて知った。これらは全て生活の知恵、身の処し方として彼の頭脳に、身に蓄積していつているのだ。彼を不幸な少年と一面だけ見るのは止めようと東彦は思った。
「魚屋さんとも親しくなっていたんだね。将来は魚屋さんか、そうしたら私も勇樹くんのお得意さんになるよ」
「魚屋さんもいいですが、僕はもつと安定した職業につきたいのです」
それを聞いた東彦は「えっ」と声を出し、まじまじと勇樹の顔を見つめた。彼はまじめな顔でいつものように笑み

をたたえていた。

「安定した仕事」

東彦は思わず問い返してしまった。十一歳の少年が抱く夢にはあまりにも現実的でつましやかに聞こえた。

「はい、できたら警察官です。警察官は格好がいいし、世の中の安全のために働いているからです。もし、警察官が無理だったら市役所の職員です。警察官も市の職員も公務員です。なんとと言っても公務員は安定していますから」

「どうして安定した公務員がいいの？」

「僕の家は貧しいです。そのためおおかさんは夜遅くまで、場合によっては朝まで働いています。兄ちゃんはあまり家に寄り付きません。これも貧しさのせいです。貧乏は家族をバラバラにします。僕は将来安定した仕事に就いて家族を安心させ、一緒に過ごしたいのです」

彼は、物心がついて以来、辛酸を舐めつくすような生活をして来た。その苦勞の極限から絞り出すようにして考えたのが「家族そろって、にこやかな生活を送る」であったのである。

「勇樹くんはとても家族思いで、その家族の幸せを真剣に考えるすばらしい人だね。先生は君の足元にも及ばないよ。夢がかなえられるようがんばってね」

東彦は勇樹の顔をしみじみと見つめた。その瞳には温か

さがこもっていた。

「先生ありがとうございます。僕はがんばります」

にこりとすると、彼は「新しい算数4上」の教科書を開いた。そのページには少数のたし算と引き算の問題が載っていた。文章問題などは飛ばし、計算を中心に学習をして来、なんとか四年生の算数教科書を使用する段階まで来たのである。

霜月も余すところ三日、師走が目前であった。彼の定年退職は残すところ四カ月と迫っていたのである。一日過ぎれば退職日が一日近くなる。「一日を大切に」ということばが身に染みた。東彦は校長室で個別指導をすることなどは年度当初には考えもしなかった。今、このような機会を与えられ、教えることの難しさ、喜びを噛み締められることは、教師冥利に尽きるとしみじみと感じるのであった。

パタパタと走る足音が聞こえてくる。その足音が大きなドタドタと聞こえて来たかなと思うと、ドアがいきなり開いた。校長室で執務をしていた東彦が「何事か」と思いついながらそちらへ視線を向けた。

「校長、大変だ」

五年生の五条英介が開いたドアに右手を掛け、ゼイゼイと声を立てて大きく呼吸をしている。開いた右手を胸に当てている。そして、口を開き、大きく息を二度ほど吐き出

すと、また、大きな声で言った。

「勇樹のかあちゃんがバクられた」

英介は気が短くて、喧嘩沙汰の絶えない子であった。東彦が、その喧嘩を止めに入ることがあった。その時、勢いの余った英介は、東彦にまで殴りかかって来たのである。咄嗟にその腕を取ると背中を巻き、腰を入れるや否や回転させ、投げ飛ばしてしまった。「しまった」と、東彦は口の中で叫んだ。さーっと血の気が引いて行くのを感じた。そして「ただでは済まないな」と、にわかに後悔の念が心の中がうずいていくのを感じた。

英介は立ち上がると、腰の辺りに掌を当てさすっている。

「ごめん、だいじょうぶか」と東彦が声をかけると、「えへへ」と笑いながら、「すみません」と、英介は頭を下げ、

「僕が悪かったのです」と言いながらまた、頭を下げた。

「そうか、よかった。でも、念のために保健室の先生にみてもらおうか」と東彦は言った。

「校長、こんなのいつものことです。この程度で保健室の先生に看てもらうなんて僕のプライドが許しません。どうか気にしないでください」

英介は笑みさえ浮かべている。

「そうか、それじゃ仲直りだ」

そう言うと東彦は右手を差し出し、英介の手を握った。英

介はうれしそうに何度もその手を振った。

以来、英介は「校長、校長」と慕って来るようになった。幾度も「校長先生」と呼べと注意したのだが「ぼくは校長と呼んだ方が僕の気持ちにぴったりします」と言い張り、「校長」という呼び方を続けている。

「何！バクられた。英介、そんな大変なことを誰から聞いたんだ」

思わず椅子から立ち上がった東彦は、大声で聞き返した。「勇樹の母親が逮捕された」などとはただ事ではないと思つた。東彦の脳裏に「家族を大切にしたい」という勇樹の笑顔が浮かんで来た。

「勇樹の兄貴から」

まだ息が完全に静まらない英介は胸に手を当てながら答えた。

この日は冬季の休みが開始する四日前であった。児童たちは給食、そして掃除終了後、一斉下校していた。下校から二十分ほど経ち、校内は潮が引いたように静寂に包まれていた。

「兄貴はどこにいるんだ」

兄貴とは中学二年の恭一である。中学生の恭一が小学校に、しかもこの時間帯に居ることがおかしい。

「この下に」

英介は通常に戻った声で答えた。

校長室、職員室は二階にある。校長室の下の一階部分は広い通路になっている。そこに恭一はいるといのである。「なぜそんなところにいるのか」という疑念が東彦の心に広がった。

「恭一と明日の遊びのことで今日の放課後会うことになっていました。僕が送れたもんだから恭一は弟たちと一緒に僕を待っていてくれたんです」

英介はまるで東彦の意を汲んだように話した。東彦は英介の話から勇樹たちが下校してない理由が分かったのであった。

「じゃあ、すぐ呼んで来い」

何はともあれ、恭一から直接話を聞くことが先だ、と東彦は判断した。

「あいよ」

調子よく応えた英介は、また走って行った。その背に「走るんじゃないよ」という東彦の声は、当然ながら届きはしなかった。

「校長、呼んで来ました」

直に英介は戻って来た。彼はもう校長室の中であった。恭一は入り口で直立不動の姿勢で立っている。さすがに現

役の暴走族の彼も初めての校長室には遠慮があり、緊張感もあつたのだろう、と東彦は思った。

「入れよ」

英介はまるで校長の代理人のごとく口を利いている。その口調、話の内容からして小学生の英介と恭一は対等の関係、もしくは英介がリードをしている節が見られた。英介を「小学生のかわいい坊やとだけで見てはいけない」と東彦は思った。

恭一に尋ねると、母親の逮捕は事実であった。今朝八時ごろ警察がやって来て部屋の捜索や尋問を行った上に母親は警察署に連行されていった。警察署員たちが来た時には澄江と勇樹は既に登校していた。恭一はその時分まだ布団の中であった。

逮捕されたのは母親だけではなかった。同居していた男も一緒に連行されたのだ。恭一の話から推測すると、運動会に来ていた者と同一人物に違いなかった。その一部始終を恭一は部屋の隅で震えながら見ていたのである。

勇樹兄妹が母親の無様な姿を見ることがなかったのは幸いであつた、と東彦は胸を撫でおろした。まじめで真つ直ぐな勇樹にはあまりにも衝撃が強すぎたろう。そして、その光景はトラウマとなつて生涯彼を悩ますことになるかもしれないと思つた。

恭一が答える前に英介が答えて来た。

「この下にいます。待たせています」

答えた英介は得意そうに顔を上げて東彦の方を見ていた。「英介くん、いろいろとご苦労さん。悪いけど勇樹くんたちを連れて来てくれる」

「はい、任せてください」

英介は喜び勇んで校長室を飛び出して行った。彼は内心、人に役立つことをしたいと常々思っていたのかもしれない。そして、更にそれが認められ、褒められることを。

今、彼は「学校で一番偉い」と思われている校長から直に頼みごとをされている。彼にとつては願つてもないことであり、名誉なことでもあつた。心が弾まないはずはなかった。

東彦は英介が迎えに行ったことを見計らい、恭一に英介との馴れ初めについて聞いた。それは恭一の住まいのコンビニで支払の列に並んでいた折、十円不足の恭一に後ろの英介が出してくれたことから付き合いが始まった、という。

それ以来、恭一は英介から奢ってもらうことが多くなった。小遣いに不自由せず、五年生ながら体力にも勝る英介は次第に恭一を下に見るようになった。東彦がホツとしたのは英介が暴走族とは全く関りがなかったことである。彼の杞憂であつた。また、恭一も暴走族とはそれほど深い関係で

東彦はそれで納得した。「役所の人」とは「児童相談所の職員」であると。「それで勇樹と澄江は」

はなく、まだ単なるギャラリーのレベルに過ぎなかった。また、英介と勇樹の関係は、男気にあふれた英介が何かと面倒を見てくれる貴重な存在で、ありがたい関係であると恭一は語った。しかし、彼らの関係がいつ壊れ、また良からぬ方に向かわぬとも限らない。そうならないように東彦は懇切に説いて聞かせた。

勇樹はいつもの笑顔はなかった。緊張し、不安そうな顔をしていた。澄江もおどおどし、勇樹の上着の袖口をぎゅっと握っている。

東彦は三人に「しばらくはおかあさんには会えないかもしれない。しかし、三人仲良くし、助け合いなが暮らしていくんだよ」と話した。

また、英介には「勇樹のおかあさんが逮捕されたことはだまっているんだよ」と、念のために伝えた。しかし、口の軽い英介が我慢できるのはせいぜい数時間であろうことは承知の上であった。

自転車で来ているという恭一に「気をつけて帰るのだよ。相談にはいつでも乗るから」と言い、その後姿を見送った。まさかそれが永の別れとなることは想像もしなかった。

彼らは市内の児童養護施設が定員いっぱいということで、市外二か所に分けられて引き取られた。澄江と勇樹、そして恭一と。優しい妹思いの勇樹が澄江と同じ児童養護施設

心底を思うと、東彦は胸が痛くなるのを抑えようがなかった。

「それでどうだったの」

玄関先に出迎えた妻の弘子が、帰宅した東彦に向けての開口一番のことばであった。

「ああ、すごく幸せそうで、安心したよ。子どもは女の子で、肌はびかびか光る桜色で、眼のくりつとしたとてもかわいい子だったよ」

「ふーん」

弘子は子どもにはあまり関心がなさそうだ。

「お茶を飲みます。陶芸仲間の裕子さんから頂いた足柄茶があるわよ」

夫の茶好きを承知での弘子のことばであった。

「ああ、ぜひお願いしたいね。自転車だったから体が冷えているし、喉も乾いているから」

「分かったわ」

そういうと弘子は台所へ立った。

東彦は、ガストロップの前に座り、冷えた手をこすった。そして、改めてファミリーレストラン「道ばた庵」での勇樹たちとの会話を思い出していった。

であったのはわずかながらの救いでもあった。

母親が逮捕された事件の概略を東彦が知ったのは、事件の翌日の朝刊であった。県内版の隅に短く報じられていた。それによると、同居していた男が主犯で、母親の修子は従犯であった。罪状は覚醒剤の所持と販売の容疑であった。同居の男は反社会的勢力に所属し、修子の店を拠点にして覚醒剤の売買をしていたという。しかも、初犯ではなく、三度目の逮捕であった。修子も再犯で、直ぐには出所出来ないという。

東彦が以前勤めていた職場はアメリカ軍の基地が近くにあった。その関係だろう、覚醒剤は遠くにはなかった。学校近くの駅で六年生の児童二人がアメリカ人とおぼしき外国人に覚醒剤を勧められた事案さえあった。そんなことから行政機関、警察、そして学校関係者も覚醒剤には神経質になっていた。

東彦は運動会当日の男のふてぶてしい顔を思い出した。

修子は決して悪意になつてはいけなかったの悪い男に付かまってしまったのだ。何が縁でそうなったのか東彦には皆自分からない。運が悪かっただけでは済まされない。母親の犯罪歴は消そうにも消されない。それだけに子どもたちへの影響が心配されてならない。ましてや勇樹が望む「家族揃っての楽しい家庭」は、当分望むべくもない。勇樹の

「あの時、校長室で先生から勉強を教えてくださいな本当にありがとうございました。お陰で何とかみんなにも追いつき、高校も卒業することができました。今あるのも先生のお力があつてのことです」

そう言う勇樹は深々と頭を下げた。

その勇樹の隣には娘、そして、その隣に彼の妻が柔らかな笑みをたたえていた。娘に向けられた彼女の視線は慈愛に満ち、いかにも優しい気であった。

「今あるのは勇樹くんの努力とご家族の支えがあつてのことだよ。私はほんの少しお手伝いしただけだ。ところで仕事は」

「はい、道路舗装会社です。夏は上と下から熱射が襲い、冬は寒さとの闘いです。それに残業や夜間の仕事もあり、とてもきついです。しかし、一緒に働いている仲間とはとても気が合い、上司も家庭の事情などにも理解があり働き易いです。また給料もまずまずなのでこの先もがんばっていくつもりです」

「そう、それはよかった。勇樹くんは気遣いもでき、まじめに仕事をやるタイプだからね。同僚や上司からも信頼されているだろう」

そのことばを聞いて、勇樹はにこにことした。その笑顔は小学生の時と少しも変わっていなかった。

「ところで奥さんもお仕事をお持ちで」
 「はい、介護福祉士をしています。和佳奈と申します。勤務先が自宅に近く、しかも託児所が併設されているのでとても助かっています」

童顔の勇樹に比べると年上に見えたが、実際は同年齢だった。多弁ではないが、落ち着きのあるしつかり者の妻という印象を東彦は受けた。それに堅実で人に役立つ介護福祉士職は、勇樹の希望に叶うものであったに違いない。
 「良き伴侶を得、幸せでよかった」と、東彦はしみじみと思った。

赤ん坊がテーブルに上がるうとしている。初対面の東彦の顔を見つめ、小さくふくよかな手を伸ばして何かをつかもうとしている。にこにことしている笑顔が東彦の心を幸せにしてくれている。笑顔は父親譲りなのだろう。
 「名前はレンと言います。十月月になります。この子のためにも一生懸命働こうと思っています」

幸せな家庭は、彼の小学生以来の夢だった。その夢を早々に果たしている。東彦は勇樹から学ぶことが多いなと思った。

「おかあさんや妹たちは」
 東彦がこのレストランに来る時から気になっていたことを口にした。

「はい、母親も妹たちも元気で。二人とも自分の所からごく近いアパートに住んでいます」

「ああ、それはよかった。ほんとによかった」

妹も母親も働いているという。小学生の時から家族思いを口にしていた勇樹は、しつかりとそれを実現していた。特に東彦には彼の母親が健在であるということは格別なものであった。恐らく彼女は六十歳前後になったと思われるが、何かしらの職を得、時折家族で食事会などを行っているのだろう。明るく答えた勇樹の表情から東彦はそんなことを想像した。

ロボットが注文をした料理を運んで来た。東彦がこんな風景を見たのはほんの数カ月前である。今やいたるところで目にする。しかも料金支払いも機械相手に行う。人件費の節約なのである。あるいは人手不足を補うためなのである。時代の変革の速さに東彦は驚いてしまった。この速さにはとても付いていけないと思う。

勇樹は空腹だったのか無心に箸を動かしている。和佳奈は娘をあやしながら料理に手を伸ばし、フォークでハンバーグを上手に切り、口に運んでいる。それを眺めている東彦の表情に笑みがこぼれた。そして、その顔はまるで家族で食事をしているような幸せそうな表情であった。

「お待ちどう様」

弘子はそう言うと、テーブルに茶碗を置いた。ゆるやかに湯気が立っていた。

「ランチは楽しかったみたいね。それで二十五年ぶりに会った教え子はどんなようすだったの」

「それが昔とあまり変わらないのだよ。笑顔の絶えない丸顔は相変わらず好感を与えてくれるよ。しっかりと会社に勤め、経済的にも安定しているようだった。安心した」

「経済的安定は家庭を維持していくためにも大切な要件ね。それで赤ちゃんはどうだった」

やはり弘子も赤ちゃんには関心があったのだった。
 「それが桃のようなほっぺにクリッとした目でね、私のことを全然怖がらず、それどころかテーブルに上って近づこうとしたよ。前歯が二本生えていて、笑う度にその歯が見え、それがまた可愛いんだ。うちも・・・」

と言いかけてそのことを飲み込んだ。言えば悲しく、寂しくなるだけなのを二人とも十分に承知していたからだった。二人には孫がいなかったのだ。

「あなた気に入られたのね。何よりだわ。けがれない無私の心の赤ちゃんに好かれるのは名誉なことよ。それじゃ可愛いくなるわね」

弘子の言う「可愛い」ということばには抑揚がなかった。

彼女も夫と同じ気持ちだったのだろう。

「名前が変わっているというか今風なんだ。カタカナのレンド。当初は恋愛の恋にしようとしたが、名前にちなんで恋多き女性に育つては何かと苦労だろうと、どうとも意味が取れるカタカナにしたらしい」

東彦は話題を変え、暗くなりかけたその場を何とか明るくしようとした。

「親となると子の先々まで心配するのね。どこの親も同じだよ」

そう言うと、弘子は勇樹からの年賀状を手にとると、レソンの写真をじつと見つめていた。

弘子のその様子を見ながら東彦は「それからね」と言っていた。

「何、勇樹くんが何か言ったの」

すかさず弘子は質問をして来た。弘子には先を読む才に抜きんでているところがあつた。東彦の言わんとしたことすかさず掴みとっていたのだ。

彼はこんなことを言ったんだよ。

「先生、おむすびをありがとうございました。あの時のシヤケの味は今でも忘れません」と。私は言われてはっと思出したんだ。それに「思慮の浅い行為」という批判も。

妻に話しながら東彦は、あの時の光景をありありと思いつかべた。彼はそのことをかいつまんで妻に話した。

「そんなことがあったんだ。私はちつとも知らなかったわ。しかし、二十五年も忘れないでお札を言われるなんて、あなたいい教師仕事をして来たということよ。文字通りおむすびがあなたと勇樹くんをむすんでいたのね。桜の季節になったらレンちゃんたち家族を招待したら。隣の公園は桜の名所だし、遊具もいっぱいあるから楽しめるはずだわ。それにレンちゃんと一緒に遊んだらあなたの身も心も若返るかも」

東彦も考えていたことであつた。久しぶりの夫婦阿吽の呼吸であつた。

「あらっ、お茶がなくなっているわ」

弘子はそう言うのと、急須からお茶を注いだ。微かに甘い香りが立った。部屋に差し込む陽の光は明るさを増していた。

付記 今号よりペンネーム「ゆとろ 満」を「ゆとろ 漫」に変更します。